

令和6年度 第2回図書館協議会議事録

日時：令和6年11月6日（水）午後3時00分～午後5時00分

場所：あけぼのパーク多賀 2階 大会議室

出席者：國松会長、夏原副会長、宮野委員、福井委員、神細工委員、松宮委員、山中教育長、本田館長、川瀬館長

事務局：小牛尾、西川

欠席者：梶川委員、高橋委員、大野委員

1. 事務局挨拶

2. 教育長挨拶

教育長：皆さん大変お忙しいところお集まりいただきましてありがとうございます。ようやく秋に入ってきたと言えるのか、時期的に四季の巡りが少しずつれているような感じもしますが、だいぶ秋らしくなってきました。秋は文化的な行事とかスポーツ的な行事も多くあります。今朝はたきのみやの広場でグランドゴルフの大会があって、多くの方が参加しておられました。本格的に文化とスポーツの秋が実感されてきています。

午前中には事務局会議があり、その中で館長から今期全般の図書館活動等の説明があったのですが、学校でも図書館の活用を図っていますが、図書館も積極的に色々な情報発信や事業を行っていて、良好な形で活動を行っていると思っています。とは言え、様々な課題がありますので、お気づきの点があればご意見をいただければと思っています。図書館は、住民の皆さんや子ども達にとっていろいろな情報発信の場でもありますので、情報を得られる場、学習ができる場として、益々充実していけるように皆さんのお力添えをいただきながらと考えておりますので、どうぞよろしくお願ひします。

川瀬館長：本日の会議ですが、水曜日ということで高橋先生と大野先生は職員会議等がございますので欠席されます。また、梶川委員は会議のため欠席のご連絡をいただいております。出席委員は6名で、過半数に達しておりますので、規則により会議は成立いたしますので、これから会議を開催させていただきたいと思ひます。

お配りした資料の説明をします。ホチキス留めの資料ですが、最初がいつもの利用状況の報告です。次のカラーで写真が載っているものは、4月からの行事をまとめさせていただいております。その後の資料は、今日の会議でお話しいただく参考にと資料を作って参りましたので、それを見ていただひてご意見いただければと思ひます。よろしくお願ひします。

3. 会長挨拶

國松会長：今年度、2回目の会議になります。7月末以来ということになります。今日の会議では、議題として、9月末での半期の図書館の活動報告として利用状況を含めて説明をいただきます。それと前回から、答申から10年を迎えてということで、平成26年、10年前に図書館協議会から「今後の図書

館運営について」の答申が出ていますが、それ以降、図書館がどのように活動していくのかという答えが出せていないので、全国的にも運営方針・計画を決めて図書館サービスをしていきたいと思いますという方向性があるので、それに向けての協議となります。10年前に答申で挙げられたもので、達成できているもの、できていないものがありますので、答申で挙げられている項目ごとに見ていって、これから多賀町の図書館としてどうしていったらいいのかということで、皆さんから建設的な意見をいただければと思います。

前回では、この資料3ページの図書館協議会のあたりまで話を進めました。本日は、移動図書館車についてです。管理運営の章に記載されていますが、図書館サービスとしてのあり方にも及ぶと思いますので、管理運営に限らずに今後どうしていくかをご意見いただきます。

本日はこの二つと言うことで、17時までで時間配分しながら進めたいと思います。それでは先ず、今年度の上半期の利用状況について、事務局のほうから説明をお願いします。

4. 報告・協議事項

(1) 報告

令和6年度実績中間報告について

川瀬館長：最初に「図書館2024（令和6年度）」をご覧ください。まずは図書館の利用状況です。貸出冊数が9月までで、昨年度が51,402冊、今年度が50,851冊で、昨年度に比べ551冊ほど減っている状況です。4月がだいぶ落ち込んでいましたが、9月で少し挽回してきたかなと思っていたのですが、10月に入ると500冊ほど減になってしまいましたので、10月末だとトータルで1,000冊ほどの減になっている状況なので、中々利用冊数は上がらないという結果です。町内の利用についても同じく昨年度を下回っている状況です。移動図書館車についても利用は減っていますが、延べ利用者のほうは令和5年と令和6年だと、339人と348人で増えている状況です。人数が増え冊数が減っているというのは、移動図書館で各こども園に回らせてもらっていて、お子さん1人に1冊借りていただく形で巡回を行っているので、利用人数は増えるが、利用冊数は1人1冊なので減るといことなのかなと思っています。図書館行事では、おはなしのじかんの参加者は同じくらいで、映画会のほうは減少しています。各コーナーについては、通常の見学コーナーと企画の見学コーナーを毎月、あるいは2か月くらいの期間で行っています。あと、図書購入状況の進捗は、昨年度の購入冊数（実績）と比べてなのですが、49.3%と半期分の資料を購入しています。また、利用支援サービスとして、障がい者や高齢者を含んだ利用者にやさしい図書館づくりということで、資料費を別枠で持っていて、こちらは54%の進捗状況です。主に大活字本や、今年度は外国語絵本などを買わせていただいています。今年度の利用状況については簡単ですが以上です。

続いて、令和6年度の事業報告の説明を順に行います。館内行事では、まず5月11日に貸出冊数400万冊達成記念で記念証を贈らせていただくイベントをさせていただきました。続いて、夏休みには「夏休み図書館フェスティバル2024」を行い、しおり作りやおしごと体験、ブックカバー体験をお子さんに、様々な図書館体験として取り組んでいただきました。そして「絵本の広場」は、10月6日に図書館ボランティアさんと県立図書館のこどもサポートセンターさんにご協力を得まして開催させ

ていただきました。絵本の広場に併せて、博物館の協力でシャボン玉遊びを行いました。シャボン玉遊びは大変人気で、それらを含めて全体での参加者は120名とたくさんの方に来ていただきました。続いて「ハロウィンパーティー2024」は10月26日に行いました。参加者による仮装コンテストと2組のボランティアさんによるおはなし会、博物館と協力して謎解きクイズなど、楽しい図書館の一日となりました。館内展示では、常設展示として季節や行事にちなんだ本の展示をしています。こちらは毎年同じテーマでの展示をしています。また、企画展示としては、図書館職員が企画したテーマで利用者の年代あるいは興味・関心を引くテーマで展示を行っています。「年代別のおすすめ本」展示や「宿題応援コーナー」「戦争と平和」「国スポ・障スポ」の関連本展示、夏休みには「図書館員おすすめの本」としてリストを作り、展示を行いました。続いて、園・学校連携ということで、移動図書館「さんさん号」でこども園へ保育中の巡回を5月1日から月1回の訪問をさせていただいています。こちらは、園児自らが、自分のカードで絵本を選んで借りることで、本に親しめる読書環境を作っていく、そして、保護者が図書館まで連れていくのが困難という環境の子ども達にとっても自分で本を選んで借りるという読書の楽しさを感じてもらえれば、ということで巡回しています。続いて、多賀中学校のロボットプログラミング授業に関連した資料の展示は、中学校で今年度の学習内容の一つであるロボットプログラミングの授業を行われましたので、それに関連する図書館の資料を学校に展示して生徒さんにも利用、貸出をしていただくことをさせていただきました。多賀中学校2年生の短歌作品展では、国語科の授業での「短歌」の成果を図書館で展示して、ご来館される方に見ていただき、中学生にも来ていただくということで実施しています。10月15日には多賀中でビブリオバトルを開催しました。多賀中の全校生徒が体育館に集まって、図書館職員の司会進行で、国語科の先生と県のこどもサポートセンターの司書2名、中学校の学校司書の計4名のバトラーでのビブリオバトルに参加しました。これは、中学校国語科の先生から「ビブリオバトルとは一体どういうものなのかを生徒さんに見せてあげたい」という要望があり、図書館と一緒に企画をしながら、滋賀県立図書館の職員にも助言いただき、学校で開催させていただきました。最初は、生徒さんが聞いてくれるだろうか、発表者に対しての質問が出ないかもしれない、と思っていたのですが、たくさんの生徒さんが質問をしてくれてたいへん盛り上がりました。どういう形になるか分かりませんが、来年度にも繋げていけたらいいなと思います。中学校の授業の一環となりますので、学校が今後どう進めていかれるかもありますが、そこに図書館も関わっていけたらと思っています。続いて、多賀中2年生の「都道府県紹介パンフレット」は、社会科の授業で紹介したい都道府県のことについてまとめたパンフレットを生徒さん一人ひとりが作られたので、それを図書館で現在展示しています。「多賀中推しの本展」こちらの展示は今日までですが、昨年度に続いて全校生徒、教諭などが推しの本をイラストと文章で紹介したカードを展示させていただいています。こちらは中学校の美術科の先生がアンケートをとりまとめておられるのですが、たくさんの方が見に来られていて、感想も寄せていただいているので報告もできるかと思います。それぞれの子どもたちが、自分の読んだ本を誰かに紹介したいという思いで書いているので、興味深く見られるのではないかなと思います。

以上のとおり、半期の振り返りということでの報告でした。

國松会長：上半期の活動状況を報告していただきました。説明があった部分でご意見ありますか。

川瀬館長：貸出冊数や利用者数ということでは、事業は前の年度よりも多く行っているのですが、結果としてすぐに現われません。事業の成果が貸出冊数に反映されるということではないのかなと。例えば、ハロウィンパーティーや絵本の広場を行っていて、その日に限って利用冊数が増えているかということ、そうではありません。そういう意味ではそのまま貸出しや利用に繋がるということではなくて、そういったことで図書館に来ていただいて図書館を知ってもらう、あるいは図書館へ来ていただいた体験で次にまた来よう、というように広がっていけば徐々に利用に繋がるのかなと思って実施しています。今年度はここまででこのようにやってきましたが、評価しながら色々工夫して次年度に繋げていきたいので、もっとこんな風に工夫したら、といったご意見を頂ければ有難いです。

宮野委員：中学校と一緒に連携して事業を多く行われていて、図書館に来て「今こういう展示しているんだな」という感じで見せてもらって、生徒達の推しの本を読んだり短歌を読んだりして、楽しい気持ちで見させてもらっています。これらは、もちろん中学校の生徒さんにも、この期間に図書館で展示していることをお知らせされていますか？

事務局：はい。ご案内させていただいています。

宮野委員：その展示から本の貸出しに繋がっていないというお話があったので、例えばここで推しの本を見て〇〇さんが推しているこの本を借りよう、という感じの繋がりはまだ今のところは無いように見受けられますか？

川瀬館長：推しの本展で紹介してもらっている本は館内で展示しています。自分が読んで本当におもしろいと思った本をということで、コミックなどが結構多かったのですが、資料が制限される場所がありますが、展示した中からも借りてもらっていますので、すぐには貸出しに反映しないかもしれませんが、繋がっていくといいと思います。

この展示は、図書館が積極的に連携を求めて行ったというよりは、学校の先生と色々な話している中でこんなことしてみようかという話の流れで始まっているものなので、これから多賀の図書館でヤングアダルト・中高生向けのコーナーを作るときに材料になっていけばいいかなと思っています。

宮野委員：今まで学校との連携があまりなかったように思いましたが、多賀中学校に美術の先生が来てくれて、その先生はすごく多賀愛が強い先生なので、多賀のことを色々な所で発信していきたいという思いがあってしてくれているということを中学校の保護者さんから聞いていたので、今はすごくいい連携が取れているので良かったなと思っています。

あともう一つお聞きしたいのですが、ビブリオバトルですが、ここには生徒さんのことが書かれていないので、生徒さんがビブリオバトルに出られたのではなくて専門の方がされたということですね？それで、質問が生徒さん達から色々出たということですね？

川瀬館長：全校生徒を集めてなので、その中で手を挙げてマイクで喋るのは中々恥ずかしいかなと思っていたのですが、怖がらずにいろいろな子達が質問してくれたので、その辺りは国語の先生の腕もあるし、うちの司会進行のおかげかなと思っています。あとは、バトラーの皆さんも上手にされていたので、ビブリオバトル自体はうまくいったかなと思います。次は生徒さんがバトラーになって、自分の好きな本を紹介していくことが出来るかということですが、全校生徒の前では中々言いにくいので、学級で4～5人の班を作ってそこで言い合うとかをすると案外いけるかなと思います。そういう形でのコミュニケーションツールになって読書意欲や説明する能力に繋がっていくのかなと思っています。

宮野委員：ちなみに時間は1人どのくらいかかりましたか。

事務局：発表が4分間で、質問で2分間取っていましたが、2分間では収まらなくて、手を挙げてくれた方にはすべて話を聞きました。

宮野委員：全部で大体3人？4人？

事務局：バトラーは4名です。県立から2名と学校司書が1名と国語科の先生が1名で計4名です。

宮野委員：ありがとうございました。

國松会長：ビブリオバトルはデモみたいな感じですか？

事務局：デモみたいな形ですはじめにお話しを頂いた時は、こちらは生徒さんが出るという形でお手伝いできないかとお話しをしていましたが、先生としては、今回はプロの方たちのビブリオバトルを生徒に見せたいという学校の意向でした。この条件で県立の子ども読書サポートセンターにご協力いただけたので開催させていただきました。

國松会長：元々ビブリオバトルというのは、図書館が始めた時は、下手でもいいからとにかくやり方を教えるのではなくて、実際に自分が読んで面白いと思った本を発表するというスタイルでやりましょうということで、あまりやり方を教えるとその型にはまったようにしかしないからということが始まった当初はあったけど、それから思うと少し違うような感じもします。

事務局：先に学校の1年生、2年生、3年生の授業をしてもらいまして、各学級の中でビブリオバトルをやったうえでの最後にこのビブリオバトルを持ってきました。来年はこの舞台に生徒の皆さんが立てるようになったらいいなという締めで終わらせていただきました。4人のバトラーの方は、それぞれ違った切り口で本を紹介されていたので、非常にいい機会でした。

國松会長：やり方を教えないでやるほうがいいという形から始まっているので、どんな形でもいいから

本当に面白いと思ったことを話しましょうというもの。元々、大勢を前にしてするものでもなく、形を教えてしまうとその型にはまった形でしかやらなくなり、こんな本を紹介したら恥ずかしいなど色々なことが起こってくるので、先生はどうしても1つの形を作りたいと思っているが、図書館としては自由に個人の思いを出してほしいところがあると思います。実はこれは私が現職の時に県全体で始めました。その時は県の館長をしていた立場で、決まった形のものは一切何も見せたりはしていないし、本当に自分のことを言ってくれたらいいという形でスタートしました。少し個人的に思うのは、形が変わってきたのかなという感じを受けます。館長どう思われますか。

川瀬館長：ビブリオバトル自体がどちらかといえばスポーツ系でやっていたが、これを嫌って「ビブリオバトル」の「バトル」を取って「ビブリオトーク」などと言ったりもしていますが、基本は決まった時間の中で読んでもらいたい本を紹介する、それを聞く、それに対して質問するという一定の決まった部分の中でコミュニケーションツールを使うという感じで紹介する形だったので、紹介の仕方については特に決めて説明はしていません。今回はある程度慣れた人がやっているのだから、紹介の仕方も上手で、さすが先生だなと思うビブリオバトルでしたし、それぞれの発表の仕方で行っていただいたので、そのあたりを生徒さんは見ていたと思います。今回は、ビブリオバトルはこういう段取りで行うということを説明させていただきました。

國松会長：分かりました。「推しの本展」は、展示は外にあります関連本は中に置いているのですか。

川瀬館長：推しの本の関連本については外に置くと図書館のエリアから外れてしまうので館内に置いています。展示しているところの方が効果的かとも思いますが、その辺りもご意見あればお聞かせください。

國松会長：ありがとうございます。他ありますか？

夏原委員：学校とか保育園とかと連携されていて、今まではあまり学校のものが図書館に行くとか、図書館のものが学校に行くとか、目に見える形ではなかったものが目に見える形になって、来館される人にも分かりやすく良いかなと思います。

個人的な思いですが、本を提供するだけでなく、地域の図書館というのは色々な郷土資料とかデータベースみたいな役割も持っていると思いますが、そういう資料は多分あまり活用されていないと思っています。そういった資料も多賀町の教育分野の役割として、例えば公民館とタイアップして「地名のルーツはこうだ」「名字のルーツはこうだ」といった歴史の中で、多賀町のことを知ることもできます。僕の苗字は「夏原」ですが、「夏原」という苗字はあまりなく、僕の住んでいる所で生まれた苗字らしいです。そういったことも普段の生活では考えないですが、何かの本を読んだり郷土の事を考えたりとか、きっかけになるような事があるかもしれないので、色々な活動の中で今後、考えていかれてはどうかと思います。

川瀬会長：次の資料のところでの話になると思いますが、このようなご意見を頂くことで活動のメニューになってくるとと思います。

夏原委員：郷土関連の資料は図書館の目立つところにありますが、あまり見られていないと思います。遺跡調査の資料なども多くありますが実際あまり見ることがない。そのような資料がビジュアル化されると、遺跡があって、ここからこういったものが出てきて、それは、昔は山際の日の当たる温かいところで食べ物があって水があったからで、そういうところに人が暮らし始めていったということを、普段の生活の中ではあまり考えないですが、そういうことで歴史が繋がってきているということも考えられるとのでいいのかなと思います。

(2)協議

平成 26 年度 答申「これからの多賀町立図書館のあり方」について自己評価を踏まえて

國松会長：ありがとうございます。他にないようでしたら中間報告についてはこれで終わります。2つ目の協議は、答申についての自己評価を踏まえてということになります。前回配られた項目で3ページの(6)移動図書館車のところからです。令和6年度の事業報告でも移動図書館車を使っただけでも園への巡回を開始した取り組みについて紹介されていましたが、ここではこの10年間の移動図書館活動を行っていた中で、図書館としての課題への評価を○×でされています。移動図書館車の利用状況は、資料で見てもピークの時と比べると、園などに行かれる場合などの利用冊数の数のとり方がどうなっているかにもよりますが、移動図書館は県内でたくさんされていて、どこも昔と比べると利用が落ちてきている状況になっています。これまでの利用形態は、住民の方で図書館に遠くて来られない人に対して、近くの公民館などまで行って、そこで直接借りてもらうサービスが中心でしたが、現在では学校やそれ以外の昼間でも住民が集まりやすい施設などに巡回をする形に一部では変わってきています。これからは、さらに町の人暮らし方も変わってくる中で、この移動図書館車をどういう形で展開していったらいいのかということについて、皆さんからすぐに実現出来なくてもこういったことに取り組めばいいのではないかと、といったご意見いただければと思います。図書館の自己評価としては、利用率の向上のほうは取り組んでいるということでBになっています。しかし、地域の実状に合ったステーションの見直しは出来ていないということでCの未達成になっています。この辺りはこれからどうしていったらいいのか、今のままでいいのか、その辺りを含めてご意見をお願いします。

川瀬館長：少しだけすみません。答申のまとめについてです。協議していただく中で、前回の協議会では若い人の意見も取り入れてみてはどうかと意見がありましたが、そうすると(5)の図書館協議会のところの目指す姿、具体的な取り組みとして、例えば図書館協議会の中に高校生を入れるとします。でも高校生は授業があり、出てくるのが中々難しくなるので、具体的な取り組みとして高校生をオブザーバーとして図書館協議会に来てもらうといった取組みに出来ます。そういったことを一つひとつ書いていって、それを次の時にどこまでできるかまとめていきたいと思っています。副会長の先ほどの意見で「地域資料があるけど活用される工夫が出来ていない」ということであれば、どういう風に地域資料を

見せていくか、地域資料を使った企画展なり事業をどうやって展開していくかということが次に取り組んでいく作業になるかと思しますので、そういったご意見を頂ければそれを一つひとつ積みあげていきたい。そういう思いがあり、それを評価という形にさせて頂ければと思っています。

國松会長：いかがでしょうか。現在巡回しているステーションというのは、ひとつは学校で、あとはそれぞれ地区のどこかに停まってという回り方ですか？

川瀬館長：学校については、小学校が多賀小と大滝小の2つです。こども園は、久徳うぐいすこども園と大滝たきのみやこども園、ささゆり保育園です。施設は、清流の里とふれあいの郷と犬上ハートフルセンターの高齢者施設に行かせていただいています。その施設や小学校が遠方であれば、全域サービスに近い形で巡回しているということです。ふれあいの郷については遠方ではないです。現在巡回している場所が図書館に近い所なので、巡回する一つひとつの施設に移動図書館で行く狙いが全域サービスなのか、学校やこども園に対する読書支援なのか、その辺りをもう少し明確にしてステーションを選んでいかないといけないということがある。あと、移動図書館車が開館当初からずっと走っているので、年数が長くなっていてももう少し機動性の高いもので巡回したほうがいいのかを考えていかないといけない。その辺りの検討ができていないということでCという評価にしています。

國松会長：昔は図書館から離れた地域の広場や公民館に停まって、周辺の人に借りに来てもらうという前提で停まる場所を決めていたが、多賀の場合は、かなり早い時期にそういう前提より各学校や園に回りましょうというように変わっている。かなり前から変わっているのですか。

川瀬館長：ステーションの変遷について資料がありますが、本田館長は知っていますか？

本田館長：私がいた頃から15年前にはすでにその形になっていました。

川瀬館長：地域的な特徴で言えば、全域サービスとして、図書館から離れた地域へのサービスというのは第一の狙いで、最初に移動図書館車を巡回する目的だったと思います。そのうち、当然のことですが、子どもは1人で来られないということもあったので、大滝小学校やたきのみやこども園に行き利用していただくという形になってきたのかと思いますけど。

國松会長：最初の頃は施設には巡回していなかったと思います。地区のどこか広場を借りて停まって、周辺の人に利用してもらうようにステーションの設定をしていたはずですが。多賀の場合は、遠く離れた集落がありますからそういう所を重点に回っていたと思います。そうした中で、昼間は人がほとんどいないという状態があって、これは県内のどこも同じなのですが、どういうところを巡回するかという考え方がだいぶ変わってきたように思います。

川瀬館長：図書館の利用サービス計画をしっかりと立てて、その中で移動図書館をどうやって運行するの

かということをつとータルで考へないといけなひと思つています。子どもの読書環境を整へるためのBMでもあるし、高齢者施設へのサービスでもあるし、その辺りを改めて考へ直して、今の状況を変えましようといふところには至つていません。なほ、部分的には変へています。例へば、図書館協議会でご意見いただきましたが、ふれあひの郷は中学生が下校する時間帯に合つてないといふことで、自転車小屋に集まる時間に巡回時間をずらしました。しかし、実際には中学生が降りてきて自転車に乗り換へる時に移動図書館に寄つてくれるかといふとそんなに寄つてくれない。そうすると中学生に対して移動図書館が来ていることを知らせるとか、中学生が予約してもらつた本を移動図書館で渡すとか、そういう取り組みをやつていかないといけなひ。ただ、全体をどうするかがはっきり決まつてない状態なので、現状での見直しを行つてきています

夏原委員：極端な話になりますが、例へば借りてもらふ人を増やすとか冊数を増やすとかになると、人の多いところに行くのが一番いい方法ですよね。おそらく本を読みそうな人が一番多いのは企業だと思ひます。キンピールとかこの辺りの工場とかにいる人は電車やバスで通っている人が多いので、ほとんど町の方だと思ひますが、単純に人数とかを上げようと思へばそれも一つの方法かなと思ひます。ただ多賀町の住民に対する公のサービスといふところからは少し外れると思ひますが、施設の中の資料が活用されるという視点から見るといいかなと思つたりします。キンピールとかに行かれると結構借りる人がいると思ひますよ。

川瀬館長：色々システムとかも考へないといけなひと思ひますが、見方としてはそういった意見を頂けるのは有難ひです。人が集まるといふことではここでも意見として公民館なども言われていまましたがいかがでしょうか。

夏原委員：公的なサービスですので公的な場所を中心に対象になると思ひますが、見方の問題で、量といふ話になればそういう所を狙つたほうが、方法としては簡単かなと思ひます。

國松会長：大きい企業を回っている図書館はあります。昼休みに企業の中の駐車場で、その社員さんを対象で回っているところもあります。企業に場所を提供してもらえれば出来ると思ひます。あとはできるだけ平日の昼間に人が集まってくれるところで、スーパーの駐車場に止まっているところもあります。多賀の場合は何処になるのか分かりませんが、その辺りの設定はここなら良いといふ場所をいろいろ考へていく必要もあると思ひます。そこで、今の図書館の人員体制で何か所くらいを設定できるのか考へていったほうがいいかもしれなひ。

川瀬館長：そのようなご意見をいただいて、今後検討していきたいと思ひますが、ただ、図書館全体のサービスを考へた上で、BMの巡回はその中の一つですので、BMがどういふ風にサービスを補つていけるのか全体で考へる必要があります。そして図書館としての使命を考へると、やはり遠隔地にしっかりと図書館の資料を届けて借りていただく環境を作つていくのが本来の仕事だと思つているので、それを基本としながら、今のご意見のように人が一定集まり要求があるような所へ、お出かけ図書館といふ

か、行くというのも一つの方法だと思っています。ただ用途ごとに行こうとすると、それなりに資料を変えたりしないといけないので、その辺りは大変かなと思います。

國松会長：協議会の委員さんの中で移動図書館車が巡回してきたときに利用された方はおられますか？
以前使われた方で今巡回しているのを見ていて何か意見はありますか。

松宮委員：図書館が国道より向こうになる土田とか敏満寺の方に住まれている方に、国道を渡って行くことが困難なので本を借りたいけど借りに行けないということは聞いたことがあります。まずそこまで行けないということがあるのかなと思います。そして、巡回の表を見ていると各地域を回っておられると思うのですが、その巡回の告知はどれだけされているのかなと思います。巡回日とか告知をもう少し徹底されると、ご年配の施設を利用されている方などは移動図書館で借りることが出来るのかなと思います。そして、元気でまだ施設を使われていない方で、本を借りたいけど車の運転はしないし自転車では行けない、そういう方々に対して、行ける時間帯の告知が、時間がかかるとは思いますが上手く周知できていると、この日のこの時間に行ってみようかということで、少しではあると思いますが、動ける範囲の小さい利用者の方は待っているのではないかと思ったことはあります。

國松会長：もらったこの資料を見ているのですが、トータル40カ所以上回っているということですか？

事務局：資料は今、システムで打出してきたものなのですが、今までサービスポイントとして入力したところがある場所です。今運行しているのは先ほど川瀬館長から説明しましたように、高齢者施設3か所と3園と2小学校です。その他の今行っていない箇所の方が多いです。

國松会長：2枚目の31番とかが、もともと地域のどこかに停まっていたということですね。31番～39番のところで、大岡とか土田とか中川原とかそれぞれに字のどこかを回っていた時の名残となっていますね。

事務局：過去に回ったことのある所です。

宮野委員：今の話を聞いていて、お年寄りの人とかは行きにくいというのが、確かにそうだなと私も思いました。例えばなんですが、各字でお年寄りを呼んでサロンをされていますが、サロンをする中でプログラムにすごく困るという方が多くて、そういう所に「今月は〇〇の字にサロンに行かせてもらいます」といった感じで、サロンの代表の方に社会福祉協議会に確認してもらって、移動図書館のサービスをさせてもらいますよと伝えてもらったら、今まで図書館に行けなかった人が「移動図書館ってこんな感じなんだ」とか「こんな本もあるんだ」とか、図書館のカード作ってないので作ってみようかという人が出てくるかもしれないと思います。免許を返納して足が全く無いという方々の字に出向いて、そのサロンへお試しで行ってみたりとかして、とっかかりみたいな感じにするのもいいのかなと思う。そうすると次もまた来てほしいといった声が出たら呼んでくれるだろうし、絵本が好きな人や、お孫さんを

園から帰ってきてから預かっているのを読む本がないという方がそこで探すことができるかもしれないと思います。季節ごとの料理や手芸が好きな人がたくさんおられると思います脳トレとか好きな方も多いです。色々な本を入れてあげるのも一つの案かなと思います。私もサロンに参加させてもらっていて、10月のサロンの時に、これから寒くなるのでお花を生ける時の話題だとか、「おせちとか面倒だけど娘が返ってくるので作りたい」とか話しておられたので、料理は慣れておられるけど「こういったおせちの料理ありますよ」とか、生け花の仕方とかの本とかを入れてあげてもいいかもしれないです。サロンで折り紙をする時も毎回同じ本をコピーしているので、折り紙の本があったら「今回これを使って来月のサロンで使おうか」というように貸出に繋がっていくのかもしれないなと思いました。そうすると大体どの地域で利用があるのかが分かるし、利用者も増えていくのかなと思います。

あと、移動図書館が来るときに音楽が鳴っているのを知らない人もいると思うので、音楽を流してマイクで放送しながら走っていますとか、移動図書館車の写真を付けて回覧板で回して、これで回っていますとかいうのも告知のひとつかと思うので、そういったこともいいのかなと思いました。

松宮委員：それと併せてなんですけど、ふれあいの郷で高齢者の方の「足腰シャキッと教室」をされていますよね。広報などで見ているとたくさんの方が来ておられるので、そういった施設でのいろんな行事ごとの帰られる時間帯だと、高齢者の方とかでたまに来られる方も多いかと思いますので、「ここでこんなことしているんだ」と知っていただくと、口伝えで町内の方々に伝わるのではないかなと思います。昔からお手紙とかよりも口のほうスピーカーになって知ってもらえるのかなと思うので、まず、そこをきっかけで始めてみてもいいのかなと思いました。

國松会長：福井先生は、どこかで利用されたことがありますか。

福井委員：保育園で利用しています。保育園には保護者の方が多く来られるので、もう少しアピールをされればと思います。そして、資料にある写真のように園に来てもらうのは、こども園と比べると子どもの数が3倍ほど違うので、移動図書館に一斉に列になって並ぶというのが少し難しいのかなと思っています。ただ、保護者の方は借りたいと思っておられるし、子どもは車を見つけると「ワー」と言って喜んで寄っていくので、お帰りの時間の煩雑さや保護者の方の手荷物の多さなどもあるのですが、その辺りも併せてもう少し考えていきたいと思っています。保育園でも移動図書館が来られることをお伝えしているのですが、そもそも保育があるという状態で、申し訳ない感じがしているのですが、利用は促進していますし、続けていただきたいと思っています。私自身としては、図書館に「あの本を載せてきてほしい」と言って無理を聞いていただいたこともあり、ありがたく利用させていただいています。

國松会長：県内の図書館では、いろんな新しい場所や町のイベントがある場所に移動図書館を持って行って、そこで貸出しをするということを行っています。その辺りは図書館の職員がどこまで本の入れ替えなどに対応できるかということで、場所によって利用者を想定して本の入れ替えをするという、移動図書館の基本的なサービスは、当たり前のように行っています。また、イレギュラーな駐車場ステーションの設定にもどこまで対応できるかということもあります。とにかく行ける所はできるだけ行こう

という姿勢で行っています。学校や福祉施設、地域のサロンへ呼ばれたら行くなど、色んな取り組みをしているので、あとは対応できるかどうかというところになってくると思います。

以前と比べて今の移動図書館車の大きさですが、県内でも軽自動車を移動図書館の専用車に作り変えて巡回しているところもあります。なかなか止まる場所が確保しにくくなっているので、小さい車で気軽に行けるような体制を取り始めているところが多くなっています。あとは、館長がこだわっている図書館から離れた所に住んでいる人に対する移動図書館サービスと、施設や園の巡回の切り分けをどうするかということでは、将来的な計画で位置づける必要があります。その辺りはどこの図書館もきちんと切り分けてやっているわけではないです。既存の地域ステーションで1時間停まっても誰も来なかったとかいう時代になっているので、昼間はほとんどの人が共働きしているから、それに合わせると、ある程度の人が昼間に日常的に集まっている施設であるとか、あまり土日は巡回しませんが、土日の巡回とかを毎週の話ではないので、場合によっては行けるような体制を考えていくことも必要になるのかとも思います。

神細工委員：移動図書館のことで覚えているのは、子どもが幼稚園に通っていた際、園前での移動図書館を利用して、初めて自分の図書カードを作ってもらい自分で選んだ本を持って帰ってきてくれて、それから移動図書館の本を親子一緒に楽しむことが始まりました。それまでカードがないときには図書館に来て親子で一緒に本を読んでいたのですが、自分で本を選ぶ嬉しさもあったようです。それが全部の園でできているので、親御さんといっしょに楽しめていいなと思います。

また、読み聞かせのボランティアをして下さっていたご年配の方のお話しですが、自力では遠くには出かけられないので、バスもないですし、新しい本を選びたくても息子さんに車で図書館に連れて行ってもらうのはなかなか難しいと言っておられました。大滝の子ども達も自転車や自家用車を使わないと行けないような距離なので、今の月1回の巡回がもう少しあればいいなと思います。また、遠隔地の別の所にも増やしていただけたらとも思います。お年寄りの方で、来てほしいなと思っていらっしゃる方もおられるので、先ほどお話しがあったサロンなど、もってこいだと思いますのでぜひ来ていただきたいと思います。

國松会長：巡回場所は年度ごとに決めるとは思いますが、ころころと変えるわけもいかないのでしょうか、停まる場所は図書館から働きかけて申し込み制みたいになっているのですか。

本田館長：最近では以前からのずっと決まった所ですね。

川瀬館長：例えば「清流の里」へ行っている時に、南後谷の方にも放送して回っていますが、南後谷の人が「清流の里」に来られるかと言うとちょっとしんどいのかなと思います。そうするとたとえ10分でもいいので、近くの決まった場所に、決まった時間にそこにいるという方が分かりやすいのかとも思います。あるいは、その時に予約をしていただければ次の時に持って行きますよとか。その辺りは工夫しないと駄目だろうなと思いつつやっています。実際に巡回していると、30分ご利用を待ちながら来ていただける準備をしていますが、中々あまり来ていただけないという状態です。そこは高齢者施設で

すので、おられる方が「野草の本が読みたい」とリクエストをされて、それを何回か持っていくということもありました。また、犬上ハートフルセンターでは利用される人が決まっています、それなら移動図書館車でなくてもよいので車で決まった資料を持って行けばいいとなるので、少し意味が違ってくるのかなと思います。一つひとつの場所でなくて、全体的に行く対象とか、行く目的をもう少しはっきりさせてステーションを決めないといけないと思っています。あと、会長が言われたように人員の問題です。月に3回巡回していますが、今日もBMの運転だったのですが代わってもらっていて、月のはじめに3回の巡回とそのための準備をしているので、その間はすごく大変になります。もう少し効果的で効率的な巡回の仕方を考える必要があると思っています。

國松会長：月3回しか出ていない？毎日どこかへ出ているわけではないのですか。

川瀬館長：毎日の巡回はとても無理です。今年は運転手の私だけで行く場所もあるくらいです。

夏原委員：移動図書館は司書がついていかないと駄目とかは決まっているのですか？

川瀬館長：基本的には司書が乗ります。運転はどちらでも構わないですが。

夏原委員：どこかに委託をしては駄目なのですか。予算の問題があると思いますけど、例えばシルバー人材センターに委託するとか。

川瀬館長：運転の委託が可能かどうかというところは分かっていません。

夏原委員：図書館自体の稼働は落ちないと思います。

川瀬館長：例えば多賀小や大滝小に行くと、2人が貸出をして1人が移動図書館車の本のところにいます。そうすると、「おっちゃん、こんな本ないんか」とか「今度持ってくるね」と、その時に色々話が聞けたりするので司書が行くことは大事であると思っています。

夏原委員：要望があれば聞き取って、伝えられるような仕組みを作れば良いと思います。そういうこと自体が出来るのか出来ないのかは図書館だけの話では無いとも思いますが。

川瀬館長：その辺りも含めてだとは思いますが、どちらかだと思います。遠隔地まで移動図書館車で行って集客する、図書館がサービスをする、そのためにどれだけ人が必要なのか、現状で運営できる範囲でやっていくのか、という発想にもなるので。

夏原委員：移動図書館の利用者の向上だけを考えると、頻度を上げる、出来るだけ人の多いところに行くことが簡単なので、人の問題とお金の問題、色々あると思いますけど、そこを突き詰めていくとそうい

う話になるのではないかと思います。

國松会長：実際に運転自体はほとんどのところが委託している。シルバー人材センターや運送会社に運転を委託しているところもある。大津市は車（バス）ごと運送会社持ちでリースされている。

夏原委員：一番簡単だと思います。

國松会長：もう今は職員が運転しているところは少ないと思います。

夏原委員：町のバスとかもそうじゃないかな。バス会社に運営委託とかされているじゃないですか。同じような仕組みでやればできる。お金さえあれば出来ないことはないと思います。図書館本体の運営に力が出せます。

本田館長：できなくはないです。予算の話になりますが。

國松会長：実際には急に休んだりすることもあるようで、そういう時だけ職員が運転するようにしているようです。

福井委員：重い本を運んだりして重労働ですよ。お手伝いしなきゃという感じになります。

夏原委員：それこそ運転手を委託してボランティアの方に一緒について行ってもらうとかすると全体の稼働もまた上がると思いますが。

川瀬館長：移動図書館車自体が図書館サービスの一環なので、そのところに図書館職員が携わっていないのは少し問題があると思います。ただある部分、運転の業務だけ委託していくというのは、そういう考え方もあります。そうすると費用も発生してくるので、職員でも同じですが、そういうことをしようとする多賀町の移動図書館車をどう使うのかを明確にしない限り、予算要求は出来ないのかなと思います。

夏原委員：運用する中身は変わらないですよ。要はオペレーションだけの問題ですから、オペレーションの部分だけ委託するわけです。当然それに費用は発生するので、その費用とオペレーションの内容をどうするのかということがきちんと決まれば、やってもらうことは一緒じゃないのかなと思いますが。

川瀬館長：現状ではそういうことです。

夏原委員：お金が無いとできませんので。一番簡単なのは、車ごとどこか運送会社とかに委託するのが簡単だと思います。

川瀬館長：現状で言うと、月に3回だけの業務委託になるのでその辺りはやり方を考えないといけないと思います。

夏原委員：委託の費用が月に100万なのか、いくらなのかという、その辺りの問題は難しいですね。

國松会長：月に3回の巡回頻度は、県内で見ても極端に少ないです。移動図書館を出しているところでは週2～3回でトータルだと40カ所のステーションを回っているところが多いです。それから見るとあまりにも巡回対象を絞りすぎているところがあります。

川瀬館長：現状で言うと、月3回、1回4時間です。そこだけを業務委託するのが可能かどうかということですね。サービス全体を考えて、1か月3回の巡回を隔週で1回ずつ回れるようにすれば、それなりのボリュームになってきて、それをどうするかということになるので、一定、今後のあり方や移動図書館自体の運営を明確にしないと、なかなかその辺りを決めていけないと思っています。

夏原委員：それは位置づけの問題だと思います。ある程度の頻度で回れば当然、認知度も上がるわけですし、来てもらう人も増えると思います。今と同じやり方でやっていけば、極端に増えることはないだろうし、どこまで思い切って取り組むのか、費用対効果もあると思うのでその辺りの館長のお考えがあるかなと。

川瀬館長：結局、どうしていくかという方向性を決めた時点でないと、今の時点でこの部分だけを委託するというということではないと思います。

夏原委員：車自体が古くなってきていますので、更新もするのであれば更新をするのにどういう仕組みでやるかなど、併せて提案していくつかの選択肢の中で予算措置をしてもらえばいいのではないかと思います。今いる人の中で図書館のオペレーションだけでもしんどいと思いますので、新しくまた違うことに人を割くのは中々現状では難しいですから、そういうことにお金を膨らませてもらえるように、教育長にも頑張ってください。

川瀬館長：そのように言うだけで有難いです。答申でいただいた課題をしっかりと自己評価しながら次の移動図書館車をどう運営していくかというところの話になりますので、まずは現時点の問題点を整理した段階で、課題を設定していきたいという思いが今の状態です。そこから先ほど言うように、この部分については業務委託した方が効果的で効率的なのではないかとか、より効果的に司書を動けるようにすることとか、そういったことを考えていけたらと思います。

夏原委員：業務委託をすると事故のリスクも委託先が持ちますし、そういう意味でも町の職員のリスクが下がると思います。

教育長：今の貴重な移動図書館に対する様々なご意見を通して、基本的には移動図書館車のあり方をもう少し考えて、今出ているような形も検討しながらもう少し展開していく方法がたくさんあるように思います。今後、ヒアリングなどもありますので今のご意見は参考にさせていただきます。

國松会長：これまでの館長の話を知っていると、子ども読書活動推進と、全域サービスとを切り分けないといけないような部分に対するこだわりがあって、方向性という話になっているところがあると思います。どちらかと言えば全域サービスの中で、学校とか、地域にある施設とか、グループ、団体とか、そこにどういう風に移動図書館でサービスをするかというような形で考えたほうが良いと思います。やり方をこだわると良い方向性が作れないのではと思います。今、ほとんどの市町村合併を行った図書館では移動図書館の再見直しをしています。見直しの際に、あまりやり方にこだわらずに、とにかく要望があるところには積極的に対応すること、これまでのような地域の利用者に直接利用してもらう形では、利用率も上がらないため、行ったらそれなりに利用してもらえそうな環境のところへ飛び込んでいく形が良いという話も出ているので、そういったことでの方向性を考えてもらったほうが良いかもしれないと思います。

川瀬館長：こだわりと言うよりは一旦整理をかけたいという思いがある。移動図書館自体の役割というのは、図書館サービスの中で、全域サービスのための移動図書館、あるいは子ども読書の環境を整えるため、あるいは要求があった所へ持っていくというように、図書館の利用を拡げるという意味での使い方方をこういう方向で進めたいという、それは今の3つの方向でも良いと思っていますが、それを明確にしたうえで、移動図書館車の購入方法とか、人的な配置とか、あるいは先ほどの業務委託をするとか、を含めて考えていかないと、行き当たりばったりで、移動図書館車が古くなったので買い換えますといっても、何をしようとするかを決めていないと構築できないと思います。そういう意味で、子ども読書の推進ということと、全域へのサービスということ、利用を拡大していくこと、でのBMの利用方法を一定どうしていくのかということをやりたいと思っています。答申の課題であったので、図書館としては一旦、この時点でまとめたいという思いがあります。

移動図書館が、全域サービスのためなのか、子どもへ読書サービスなのか、利用を拡げるためなのかを明確にしないといけないと思っています。例えば大滝小学校に行っているときは、一般書も持って行きます。それは全域サービスをするためで、一般の方も来られることを想定しているからです。小学校の子どもだけを対象にするなら児童書だけということになります。そこは明確にしないと効率的にならないし効果的でもないと思っています。

夏原委員：小学校へ行って、子どもさんが対象、中心であると思いますが、それ以外の本も持っていくとすると、それ以外の本を借りる人が来ないとその本は稼働しないということになります。そのために一体何をするのかということになります。移動図書館車がそこでどういったサービスをするのかを、行く場所の人に、いついつにこういった合図でいきますということをピンポイントに告知をしていかないと利用は増えていかないと考えます。

物を売る為には人に来てもらわないといけない。人が来ないと売れないのですから、同じように本をたくさん借りてもらおうとすると、ある程度人に来てもらわないと稼働率を上げることが出来ない。そのために、回る場所、集める人のどういう人に来てもらうのか、それをどういう方法で伝達するのか、来る人は自分自身が何か読みたいという要求があってこられるのですが、それ以外のなにか違うメリットも出してあげて、そこに引き込んでいく。地域のイベントに図書館も参加して移動図書館車を認知してもらおう。そういう活動が必要だと思います。そういったイベントの時に、例えば読み聞かせや紙芝居を一緒に行ってみると、図書館の活動も理解してもらえる。そういったことを幅広く行っていくことが必要だと思います。少なくとも来た人には知ってもらえるわけですから。なかなか紙の媒体だけでは集まらないですから、今、情報を見て選ぶという選択肢が年々変わってきていますので、前にも言いましたが、もっと思い切って広報たがでも告知をする。広報の表紙のページを使って、こんな催しが図書館であるとか、図書館はこういうところですよ、とか思い切ってやなりたい。いつも決まったスペースで、決まった内容で載っていますが、特集が組まれる前のページや表紙に思い切って乗せてもらって、いろんな楽しいサービスを提供していますよ、という図書館の活動が伝わるようにした方が利用を広げるうえでいいと思いますがいかがでしょうか。

國松会長：広報に図書館の部分を持っていないのですか

川瀬館長：あります。図書館だよりを基にして広報に載せていますので、内容は図書館だよりと同じになります。お知らせする内容は決まった内容と行事の案内になります。マンネリというより、形を決めているので見られている方には変化がない。開館カレンダーがあって、移動図書館の巡回カレンダーがあって、行事の予定があってということで決まっています。

教育長：今日、事務局会議があり、そこでも発信の仕方でもいろんな媒体を通して考えて欲しいということ伝えていました。町には有線がありますが、すべての世帯でなく、特に若い世代が住んでいるところでは少ないこともあります。また、回覧やチラシばかりではなく、それらを使いながらも、若い人に発信できるいろんなツールを使って発信をしてほしいということです。今のお話を聞いていて、発想を変えてみることは大切だということ、参考にさせていただきたいと思いました。

國松会長：今日の会議ではこれ以上は時間が無いのでできませんが。

川瀬館長：移動図書館車のところは、大切なところだと思っています。ご意見をいただけるのは大変ありがたいですし、いただいた意見を組み立てながら次に進められるようにしたいと思っていますので、よろしくをお願いします。

國松会長：移動図書館を続けていかなければならないですし、もう少し臨機応変にいろんなところへ出かけて行って、人を呼び込んで利用してもらうような形を作ればどうかと思います。とにかく、イベントに車を出すと効果はありますので、その辺りを考えていけば良いのかと思います。どういう対象にサ

ービスをするのか、全ての対象のサービスを一気にには出来ないのでは、どういうところからサービスをするのかは、計画を立ててもらえれば良いと思います。また、移動図書館車を止める場所が確保しにくいこともあります。自治体によっては駐車スペースのくぼみに止めて、半分だけを空けていることもあります。そういうサイズの車を採用しているところもあります。回り方によって作る車も変わってきますので、図書館間で情報を得ながら進めていただければと思います。

宮野委員：車の話がでましたので聞きながら考えていたのですが、今の大きい移動図書館車だと狭いところに入りにくいですし、イベント事業に出かけたり前に提案させてもらったサロンに出向いたりするのなら、対象年齢が決まっているので、対象に応じた資料が積めるくらいのもう少し小さい車がもう1台あってもいいのかなと思いました。全域サービスをするためにはいろんな年齢の人にいろんな本を持っていくので、いつもの大きな自動車で回り各事業や地域のサロンでは対象の方が決まっているので、少ない冊数で小さいワンボックスカーを改装すればいいのかなと思います。予算のこともあると思いますが、教育長もおられますので、今日の見解などを反映していただければと思います。よろしくお願いします。

夏原委員：町には公用車がありますから、そういうものを月に1回、あらかじめ抑えておいてもらって、仮設式で持っていくとかどうですか。手間がかかるかもしれませんが。

5. 会長挨拶

國松会長：それでは17時になりましたので会議を終わりたいと思います。今回は、答申に対する意見交換と移動図書館の話だけになってしまいましたが、私も若い時は移動図書館にずっと回っていましたので内容については関心もありますし、どういったところに巡回してどのくらい滞在するのかなどは、町の事情にもよって違ってくるのでしょうから、その辺りは図書館で方向性を出していただければと思います。開館当初からのサービスですし、続けていくという方向でお願いしたいと思います。まずは、今の予算の中でできるところから取組んでもらいたいと思いますのでよろしくお願いします。

6. 答申のまとめについて

川瀬館長：おそらくこのペースで行くと、今年度あと2回ですので、今年度中に終わるのは無理だと思います。来年度にまたがって評価をお願いできればと思います。また、いただいた意見を参考に、前回提示させていただいたように、目指す姿と具体的取り組みとして書き込んでいって、一定まとめていきます。今できることは具体的取り組みとして書き込むことが出来ますが、最終的にはきちんとした計画を立てて、多賀町の図書館がどういうサービスを進めていくのかということ全体をまとめる必要があると考えています。そこにつなげるための意見を今回頂けたと思いますので、次回もよろしくお願いします。

それと、部分的にでもまとまったところからお出ししていこうかなとおもっていますので、次回どこまでまとめてお出しできるか分かりませんが、ABCの評価のところにもう一枠追加して、図書館協議会としての評価をいただければとも思っています。果たしてABCの評価が必要なのか、評価の基準

が曖昧なところもあるので評価しにくいとは思いますが、現時点ではお願いできればと思っています。

國松：外部評価をどういう観点で入れるかが難しいとは思いますが、図書館の現状を課題と照らしてみられるような評価にしてもらえればいいのかと思います。

次回は図書館サービスのところから始めたいと思いますのでよろしくお願いします。

川瀬館長：次回は年明けくらいで考えていますのでよろしくお願いします。

そして、今回、答申を受けての評価ということで、計画に対しての評価は行ったことはあるのですが、私自身も初めてのことで、進め方がよくわかっておらずたいへん申し訳ありません。思いとしては、答申をいただいてその課題に向けて取り組んできたのですから、10年が経過した現時点で一旦は自己評価すべきだと思っています。そして、協議会の皆様にもご意見をいただくことが必要だと思っています。いただいた意見を一つひとつ年度毎に進めていって、3年を目途にしたロードマップを作りたいと思っていますのでよろしくお願いします。そして基本計画につなげたいと思っています。一定の区切りをしたいという思いです。

國松会長：県内の市でも同じような状態で、答申をもらってから基本計画を作っていない。今年度基本計画を作ることになっているので参考にされればと思います。

川瀬館長：その辺りはその館の館長の考え方もあるのだと思うのですが、再度答申をもらいなおされたところもあると聞いています。私としては、答申をいただいている以上、答申に対してのまとめをするべきだと思っていますので、段取りが悪いようですが、次の計画に進むためには必要なことだと思っていますので、その辺りをご理解いただけるようお願いいたします。

当時答申を出された委員の方には図書館に対する要望があったはずですので、それを置いておいてというのは失礼だと思っています。早急に解決すべき大きな課題があるなどの事情があれば仕方がないのかとは思いますが、計画を立てるのなら一旦現状でまとめることが必要だと思っています。

7. あげぼのパーク多賀館長挨拶

本田館長：本日は長時間にわたりまして、たくさんのご意見をいただきましてありがとうございました。

特に子どもでは気づきにくい、企業さんを回るであるとか、イベントに行くお話しとか、サロンとの連携など、大きな気付きとなりました。あとは会長さんもおっしゃられたように、まずは職員が対応できるかというところが大切なことだと思いますが、地域のニーズを聞きながら進めてまいりたいと思います。併せまして、計画だけでなく柔軟に対応していくということも大切かと思っていますので、今後も忌憚のないご意見をいただければと思います。本日はありがとうございました。